

## 『物くさ太郎』と和歌・狂言

佐 谷 眞木人

東山道みちのくの末、信濃の国十郡のその内に、つるまの郡あたらしの郷といふ所に、不思議の男一人侍りける。

御伽草子『物くさ太郎』は、右のような書き出しで始まる。<sup>(1)</sup>この「不思議の男」は名を「物くさ太郎ひじかす」と言った。竹を四本立てて薦をかけた粗末な小屋に住み、人からもらった餅が道に転がっても拾いに行かないほどの、ものくさであった。偶然、通りかかった地頭に餅を拾うよう頼んで面白がられ、その後は地頭の命令で村人の扶持を受けるようになる。三年後、村人の懇請によって、都に長夫（長期にわたる夫役）に行つた太郎は、別人のように「まめ」になり、長夫を終えた後は、和歌の才能を発揮して美しい女房を手に入れる。系図を調べたところ、実は太郎は、仁明天皇の曾孫に当たる高貴な血筋の人物であった。かくて太郎は甲斐信濃両国の総政所となり、死後は「おたがの大明神」と現れたという。

この作品は、御伽草子の中でも有名なものの一つで、これまでに数多く論じられてきた。中でも古典的な論文に、佐竹昭広「物くさ太郎」<sup>(2)</sup>がある。佐竹はこの論考で、田舎での太郎の「ものくさ」と、都での太郎の「まめ」が性格として断絶しているという。そして両者をつなぐ性格として、「ものくさの核心には、「のさ」なる心がある」

と指摘し、太郎を「のさ者」と規定した。「のさ」とは、佐竹によれば「のさばる」心であり、地頭に餅を拾わせ  
る「横着さ」にも、都での積極的な行動につながる「ふてぶてしさ」にも通じるという。佐竹は、太郎の人物像に  
「不羈奔放」で「たくましい」中世庶民像を見ている。

さて、この佐竹の論は、『物くさ太郎』の本文中に「のさ」なる言葉が一度も使用されておらず、太郎の性格を  
「のさ」と規定する客観的根拠が何もない、という致命的な欠陥を持っている。また、中世の庶民像を「たくまし  
く、ふてぶてしい」とするのも、過剰な思い入れに過ぎないとも思われる。このような杜撰な論考が広く一般に支  
持されたのは、一九六〇年代という「時代の気分」の結果だったとしか、今日では言いようがない。

一方、桜井好朗はこの作品を「本地物」として、神話的側面に着目したが、それに対して、これを「本地物のパ  
ロディ」として「笑い」の側面から読み解いた論考に、信多純<sup>(4)</sup>と小松和彦<sup>(5)</sup>の論がある。特に小松は構造分析の手  
法を用いて、笑いの要素を抽出した。これらのパロディ説に対しては、砂川博<sup>(6)</sup>、徳田和夫<sup>(7)</sup>の批判がある。徳田は「こ  
れを「本地物のパロディ」というのなら、御伽草子の本地物の過半はパロディということになる」と指摘する。こ  
の、太郎の宗教的性格を重視するか、道化者的性格に着目するかという論争は、その後の再反論がないままに終  
わってしまったが、読みのレベルの違いということができ、いずれか一方が正しいとはいえないと私は考える。例  
えば、浅見和彦は『物くさ太郎』の作中歌に三輪山神話の影響を読み取っている。「笑い」を主題とした作品の深  
層に、神話的側面を認めることは十分に可能であろう。『物くさ太郎』は笑いを主題としているとも、本地物であ  
るとも、いつてよい。太郎に「道化的性格」を認めた信多・小松両氏の論は、再評価されねばならない。

また、そのあとは歴史学の分野から優れた分析が提示されている。特に、「あたらしの郷」における太郎の姿は、  
当時の乞食と同じだという、藤木久志<sup>(9)</sup>、黒田日出男<sup>(10)</sup>の論考は注目に値する。藤木は、太郎のような「乞食」を村で  
養う制度が、当時の社会にあったことを明らかにした。このような歴史的なアプローチは、本作品の分析に欠か  
すことができないが、残念ながら注釈的な指摘にとどまり、作品全体の分析には結び付いていない<sup>(11)</sup>。問題は全体を

読み解く際に、これらの知見をいかに有効に活用できるかであろう。

—

以上のように先行研究を整理した上で、問題の所在を基本的なところから考え直してみたい。このテキストは、これまでで示してきたようにさまざまな角度から読み解くことが可能であるが、本稿では特に「笑い」という側面から、光を当ててみたい。それは、筆者がなによりこのテキストを笑いながら読み、その笑いの持つ性格について考えたいと思ったからに他ならない。先行研究との関係においては、信多・小松両氏の論を引き継ぐものであるが、本稿では特に後半部の都での太郎の性格の分析を中心として、その「笑い」の性質を、歌徳説話や狂言とのかわりから論じる。

そこでまず、この作品のキーワードである「ものくさし」という語が、作品中においてどのように用いられているかを確認しておきたい。本文中に見えるのは、以下の五箇所である。(カッコ内は私に補った。以下同じ)

名を物くさ太郎と申事は。國にならびなきほと物くさしなり。

物くさく候ほとに。ぢ(地)も、ほしからず候。

しゆく(宿)くを、とをりけるに。さらに、物くさき事なし。

すこしも物くさげなるけしきもなし。

人の心も、かくのことく。物くさく共、み(身)は、すぐなる物也。

右のは、物くさ太郎を紹介する記述で、ここでは「物くさし」は名詞として用いられており、「怠け者」の意

である。、、は形容詞で、は地頭の「(地を)とらせん」という言葉に対する、物くさ太郎の返答。とは、物くさ太郎が、都に行く途中と都での描写で、は「物くさげなり」という形容動詞化したもの。は結末部分に記された教訓であり、太郎を直接描写したものではない。このように見ていくと、「ものくさし」は、では、太郎の性格を表しており、とは太郎の感情、は太郎を外から見た様子、態度とすることができる。つまり「ものくさし」という語は、文脈に応じて、性格・感情・態度をそれぞれ表すということになる。

・ に見えるように、「あたらしの郷」においては太郎は類い稀な「ものくさ」であった。そのものくさぶり、何に對するものだったのだろうか。確かに、道に転がった餅さえ拾わないような「ものくさ」ぶりは、あらゆる行為に對して「ものくさし」と感じていたとも読める。しかし、それでは太郎が村人に説得されて、都へ長夫に行つたのちの「まめ」への変化が説明できない。太郎には特に「ものくさし」と感じる事柄があつたはずだ。

は、太郎は通りかかつた地頭から、「命助かる仕度をせよ」と言われ、さらに「(地を)取らせん」と言われたことに答えたものだ。ここで明らかかなように太郎は田畑を耕作することを「ものくさ」く感じている。次いで地頭が「商ひをして過ぎよ」「(もとでを)取らせん」と言つたのに對しては、「今さらならはぬこと、知らんこと、なりがたく候」と答えている。したがつて、少なくとも「商ひ」は、太郎にとつて「ならはぬこと、知らんこと」ではあつたが、「ものくさき」「ことではなかつたのである。つまり、太郎はあらゆる行動を「ものくさし」と思つて忌避していたのではなく、あたらしの郷の村人たちのように、耕作をして生計を立てる行為を特に「ものくさし」と思つていたのである。上京後の太郎の態度の急変を読み解く鍵は、ここにありそうだ。

都に着いた太郎は、「あたらしの郷」にいた間とは異なり、突如として「まめ」な働き者になる。この「ものくさ」から「まめ」への急変は、なぜ起きたのだろうか。その変化は佐竹の言つよつに、「のさ」と考えなければ理解しがたいものなのだろうか。

先に挙げた「ものくさし」の用例によると、太郎はもとは性格、感情ともに「ものくさし」であつたが、以降

の、都に行く途中の感情や、都での態度では、それが否定されている。では、なぜ、太郎はあたらしの郷を離れると、「ものくさく」なくなったのであろうか。太郎の都での様子を記したの箇所を、詳しく見てみたい。

みやこにてのありさま。しなのゝ國には、まさりけり。ひがし山、にし山。御しよ(所)だいら(内裏)、だうみややしる(堂宮社)。おもしろく、たつと(尊)さ、申はかりなし。すこしも物くさげなるけしき(景色)もなし。

右には、都での太郎の様子が描かれているが、「ここで問題になるのは、「おもしろく、たつとき、申はかりなし」の解釈であろう。この箇所は、「面白の花の都や」という中世歌謡の影響が伺われ、「御所、内裏、堂、宮、社」といった都の風景を一般的に形容した表現と読めるとともに、それらに触れた太郎の感情を表現しているとも読める。そして、その感情から、次の「すこしも物くさげなるけしきもなし」という太郎の態度が導かれている。つまり、一般的に都は「おもしろく、たつとし」と感じられる場所であり、太郎もまたそう感じたために、「ものくさく」なくなったのである。こうして太郎は、召し使われた大納言殿から「かほど、まめなる者なし」という高い評価を受けるほど、よく働くことになる。

以上の変化を図式的に整理すると、以下のようになる。

(場所)	(職掌)	(感情)	(性格・態度)
あたらしの郷	地を作る	ものくさし	ものくさし
都	大納言殿の屋敷仕え	おもしろく、たつとし	まめ

右のように比較すると、都で太郎の態度が「物くさ」から「まめ」に変化する背後には、感情においては「ものくさし」から「おもしろく、たつとし」への変化があることがわかる。ここでは明らかに、あたらしの郷、つまり田舎と都とを異なる秩序に支配された空間ととらえる観念が、働いていることが理解できよう。そのとき「ものくさし」という感情の対極にあるのは「おもしろく、たつとし」であり、都で太郎の態度を変化させたのは、田舎にはない都の「おもしろさ」「たつとさ」だったのである。このような、田舎が物くさい場所であり、都が面白い場所だという二元論的対比は、都鄙の間には超えがたい懸隔があるという心性に導かれている。そして、ここに端的に見える都鄙懸隔の心性は、この作品全体を貫くテーマといつてよい。

太郎の次なる変化に目を向けてみよう。長夫の役目を無事に終えた太郎は、「よき女房」を具して、信濃に下ろうと考える。このような欲望は、太郎があらかじめ、あたらしの郷の住人たちから吹き込まれたものである。つまり、太郎に独自の欲望ではなく、村人の想像力から発した欲望である。では、あたらしの郷の人々は、現実にはありえない法螺話で太郎を担いだのだろうか？ 私はそうは考えない。御伽草子には『さいき』<sup>(13)</sup>、『磯崎』など、都からよき女房を具して帰るといふ話形を持つものが、少なからず存在するからだ。ここでは都から「よき女房」を具して帰るといふ行為が、「困難を伴うが実現の可能性もある理想」という程度の認識として村人の間に共有されていたと考えておきたい。

太郎から、相談を受けた宿の亭主は、外見も悪く、金銭も持たない太郎が女房を得たいと相談するのにあきれ果て、「天下の御許しにてあるなり」と言つて「辻捕り」を勧める。「辻捕り」とは、一人歩きの女性を辻で捕らえることであり、一種の誘拐である。当然のことながら、それは「天下の御許し」どころか、犯罪である。例えば『御成敗式目』<sup>(14)</sup>には、以下のようにある。

道路ノ辻ニ於テ女ヲ捕フル事、御家人ニ於テハ、百箇日ノ間、出仕ヲ止ム可シ。郎従已下ニ至テハ、右大将家

ノ御時ノ例二任テ、片方ノ鬢髪ヲ剃除ス可ナリ。但シ法師ノ罪科ニ於テハ、其時ニ當テ斟酌セラル可シ。

佐竹はこの式目の影響下にある、仁治三年「新御成敗状」を引いて「世が世なら右の禁制が物を言う。しかし、乱世の今は違つ」と述べているが、<sup>(15)</sup>どのような事実をもって「辻取り」が「天下の御許し」であるとするのか、その根拠が明らかでない。ここでの太郎に対する宿の亭主の言葉は明らかに虚偽であり、無知な太郎を謀つたものと判断したほうがよいだろう。太郎は亭主にまんまと騙されたことになる。このような、田舎者が狡猾な都人に騙されるという笑いは、御伽草子と同時代の芸能である狂言に多く見られるものだ。一例を挙げれば、狂言『末広がり』では、主人から「末広」(扇の別名)を都に買いに行かされた太郎冠者が、無知であつたために都人(素ッ破)に騙されて、からかさを買つて帰るといふ失敗談が描かれている。類似する内容は狂言『粟田口』にも見え、そこでは粟田口の刀を求めて都に行つた太郎冠者が、刀ではなく「自分が粟田口だ」と名乗る男を連れ帰るといふ滑稽談が描写されている。都に出た田舎者が笑われるのは、狂言ではごく一般的な笑いの型である。

かくて「辻取り」を実行に移した太郎は、清水の社頭で捕らえた女房から「離せかし網の糸目の繁ければ、この手を離れ物語せん」と、離してくれるよう懇願する和歌を読みかけられたのに対して、「何かこの網の糸目は繁くとも、口を吸わせよ手をば許さん」といふ珍妙な和歌で答えている。右の和歌は読者の哄笑を誘ふ箇所と思われるが、ここに見えるような、あからさまで遠慮のない欲望のストレートな表現もまた、都人からは田舎者にありがちな態度と認識されていたのではないか。

さらに、右に続く場面では、太郎は都の地理に不案内であつたために、道に迷つてしまい、せつかく捕らえた女房に逃げられてしまつ。

女ばうは、これをさいごと、おほしめして、あんないは、しらせ給ひたり。あなたのかうじ(小路)、こなた

のつじ、こゝかしこを、めくりちかへ、にげ。はるのかせに、花のちるごとく。にげかくれ給へり。

物くさ太郎、これを見て、「わごせはいづくへ行ぞ」とて。あなたのかつじ（小路）へつゝとより。こなたのつじへ、ゆきあひたり。すぎ（隙）をあらせず、をひつめける。

有所にて、をひうしなひ。あとへかへりて。さきをみれども、人もなし。ゆきゝの人に、とひければ、「しらず」とこたへて、とをりける。

この場面の描写もまた、都に出てきた田舎者としての太郎の姿を、浮き上がらせるものだ。さらに、女房の行方を尋ねた太郎に対して、「ゆきゝの人」が「しらず」と答えることも、都会的な人間関係を鮮やかに表現しているといえよう。

以上にみてきた諸例から、都での太郎の像を簡単にまとめると以下のようになる。

教養がなく、かつ、他人の言葉を信用しやすいために、都人に簡単に騙されてしまう。

都で「よき女房」を得て、地方に連れて帰りたいという欲望を持ち、それを即座に実行に移す、バイタリテイの持ち主である。また、自らの欲望を積極的に表現することをためらわない。

都の地理に疎く、ややもすれば道に迷ってしまう。

の教養がないという点については、太郎に和歌の素養があるところが問題となるのだが、この点については後で改めて詳しく分析したい。さて、右のゝは、太郎に限らず、中世末の都における、田舎者一般のイメージと結びついていたと考えられる。ここまでくれば明らかのように、これらの都での太郎の姿は、都人の視点から田舎者の太郎を嘲笑することを意図して造形されている。つまり、読者は太郎を嘲笑することで、その背後にある田舎者一般を笑っているのである。もちろん、このような田舎者のイメージは、必ずしもありのままの現実を反映したものである。極端にデフォルメされ、戯画化されたものである。そして、その戯画化の仕方は、狂言の笑いと近



似するものだ。この作品は、先にも述べたように、都に出てきた田舎者を笑うという、狂言と同質の笑いを持っている。

つまり、「ものくさ」から「まめ」に変わり、さらに「辻捕り」をするまでに目まぐるしく変わっていく太郎の姿は、「のさ」などという作品中にない語を持ち込まなくても、「都鄙懸隔の心性」という補助線を引くだけで、鮮やかな一貫性として浮かび上がってくるのである。従来の『物くさ太郎』論は、大まかな傾向として、太郎に対して好意的に過ぎたように思える。この作品が誰によって書かれ、また、誰が読んだものかを想像すれば、都周辺の作者・読者であることは想像に難くないのであって、そこで田舎者が笑われる文芸が成立するのは、むしろ自然な成り行きであろう。では、この作品が、都人が田舎者を笑うことを目的として作られたのであれば、太郎が最終的に成功を収めるのは、なぜだろうか。

二

『物くさ太郎』が、より成立が古いと考えられる御伽草子『小男の草子』の影響を受けていることは、既に指摘されている。<sup>(16)</sup>『小男の草子』は『物くさ太郎』よりも短い作品で、大和の国の「丈一尺ばかり」の小男が、都に奉公に出て、清水参詣の美しい上臈を見初め、文を送る。小男に会った上臈は、始めは姿を見て愛想を尽かすが、後に小男の詠んだ和歌に感動して契りを結び、その後は幸福な生涯を送った。後に小男は五条天神、女は道祖神と顕れ、恋の守り神となったという内容である。『物くさ太郎』とは、主人公の男が京に奉公に出て、清水寺で上臈を見初め、和歌の功德によって契るといふ粗筋が一致するほか、物語中に用いられる和歌も近似しており、両者の間には緊密な関係が認められる。

さて、両作品に共通する、大和や信濃といった「田舎」から上京した男が、上臈を得るといふストーリーの鍵に

なっているのが和歌の功德である。そこで、以下に、両作品において和歌がどのように用いられているかを検討したい。

まず、『小男の草子』では、以下の二首が小男と上臈と結ぶ役割を果たしている。<sup>(17)</sup>

三日月のほのかに見えて入りぬるは そらやみとこそ言ふべかりけり

数ならぬ憂き身のほどぞ辛きかな ことわりなれば物も言はれず

一首目の歌は、小男の外貌を見て姿を隠した女房に対して、小男が詠みかけたものだ。この歌では「空闇」と「空病み」が掛詞として用いられ、「三日月がすぐに隠れてしまふようにあなたが姿を隠したのは、空病み（仮病）ではないのですか」と、相手の取った態度を戒めている。この歌を聞いた女房は「さても、なりにも似ぬ歌のおもしろさよ」と言つて、障子のうちに小男を招き入れている。ここでは、「なり」「つまり外見と、和歌をよく詠むという貴族性の落差が、驚きをもって迎えられている。

二首目の歌は、女房の部屋にあつた琵琶を寄り倒して損なつた小男が、その失敗を詫びるために詠んだもの。ここでは、「理（ことわり）」と「琴割り」という掛詞が効果的に用いられ、女房は「あらやさしや」と小男を許し、「かやうのことも前世の業縁にてやあらん」と、契りを結んでいる。ここでも、巧みな和歌が二人の仲を取り持っているのである。

次に『物くさ太郎』を見てみたい。以下の三首が、女房の屋敷を訪ねた太郎の詠んだ歌である。

津の国の難波の浦のかきなれば うみわたらねど塩はつきけり

ちはやぶるかみを使ひにたびたるは われを社と思ふかや君

今日よりはわが慰みに何かせん ことわりなればものも言はれず

右の一首目は、訪ねてきた太郎をすかして帰そうと思つた女房が、柿、栗、梨に塩を添えて出したことに對して、太郎が詠んだ歌で、「柿」と「牡蠣」、「熟み」と「海」が掛詞になつてゐる。この歌を聞いて女房は「あなやさしの者の心や、泥の蓮、蘘菔金とは、かやうのことにてもや侍らん」と言つてゐる。これは、汚らしい外見の太郎が、思いもかけず和歌を詠んだことに對する評価である。ここでも、卑しい外見と和歌を詠む貴族性との落差が驚きを生んでゐることがわかる。二首目は、女房から紙を与えられた太郎が、詠んだもの。「紙」と「神」が掛詞になつてゐる。この歌を聞いた女房は、太郎に小袖、大口、直垂、烏帽子、刀などを与えて、室内に招き入れている。また、三首目は、女房が愛用してゐた「てひきまる」という琴を、太郎が転んで割つてしまひ、上句を女房が詠んだところ、下句を太郎が付けて詫びたもの。この、下句は先の『小男の草子』と同じで、「理」と「琴割り」が掛詞になつており、歌によつて琴（琵琶）を割つた咎が許されるという展開も同様である。『小男の草子』と同じく、この句を聞いた女房は「よしよしこれも前世の宿縁なり」と観念してゐる。

このように見ていくと、『小男の草子』『物くさ太郎』ともに、和歌が認められて、女房を手に入れるという展開になつてゐることがわかる。さて、このような和歌の「徳」によつて社会的地位を得たり、罪を許されたりするという説話類型は一般に「歌徳説話」と呼ばれてゐる。上岡勇司は、『古本説話集』『宇治拾遺物語』に見える以下のような歌徳説話を紹介してゐる。<sup>(18)</sup>

今は昔、木こり、山もりに斧をとられて、「わびし、心憂し」と思ひて、  
「おるへきことを申せ。とらせむ。」  
といひければ、

あしきだになきはわりなき世の中によきをとられて我いかにせん

とよみたりければ、山もり、「返しせむ」と思ひて、

「うつつ、うつつ。」

とつめぎけれど、えせざりけり。さて、斧、返しとらせてければ、うれしと思ひけりとぞ。人は、ただ歌をかまへて詠むべし、と見えたり。

右の説話は、山守に斧（よぎ）を取られた木こりが、和歌を詠んだことで斧を返してもらったというもの。和歌は「悪いものでさえなくては困るこの世の中で、善いもの（斧）を取られて私はどうしたらよいのか」という意味で、「善き」と「斧」が掛詞になっている。この説話では、木こりのような歌の教養があるとも思えない卑しい者が、当意即妙の歌を詠んだこと、さらにその歌には掛詞が巧みに用いられており、その結果として斧を返してもらったという「徳」と結びついていることがわかる。

同じく上岡は、勅撰集における以下のような歌を歌徳説話の例として挙げて<sup>19)</sup>いる。『拾遺和歌集』雑下五百四十六番歌である。

大隈守さくらしまの忠信が国に侍りけるとき、郡のつかさに頭白き翁の侍りけるを

召しかむがへむとし侍りける時、翁の詠み侍りける

老いはてて雪の山をば戴けどしもとみるにぞ身は冷えにける

この歌により許され侍りにける

右の歌は、大隈守に罰せられそうになった郡の司の翁が、「歳を取って、雪の山のように髪が白くなってしまいました。霜と（苔を）見ると身が冷え冷えとしてしまいました」という歌を詠んで許されたというもの。「霜と」

と「苔(しもと)」が効果的な掛詞になっている。この歌もまた『今昔物語集』『古本説話集』『宇治拾遺物語』『俊頼髓脳』『奥義抄』『十訓抄』などの説話集、歌論集に見える。ここでも郡の司の翁という非教養的な者が、掛詞を巧みに用いた和歌を詠み、罪を許されている。

以上に見てきたように、歌徳説話の中には、「身分の低い者や非教養的な者が、掛詞を用いた巧みな歌を詠むことで周囲に驚きを与え、よい結果を得る」という話群があることがわかる。そして、『小男の草子』や『物くさ太郎』における和歌は、まさにこのような説話類型に属するものである。このように見えていくと、『物くさ太郎』の後半部において、太郎が和歌の徳によって女房を手に入れるという展開は、「卑しい者が優れた和歌を詠むことへの驚きと賞賛」という古くからの歌徳説話の類型の上に構築されていることがわかる。ここでも、太郎の性格は「田舎者」として一貫しているのである。

ただし、ここで留意しておく必要があるのは、このような歌徳説話の型が中世後期にはすでに一般化し、むしろ陳腐なものになっていた可能性があることだ。例えば狂言『茫々頭』では、田舎者の太郎冠者が都に出て、上臈に和歌を詠みかけられ、当意即妙の返歌をし、野遊びに誘われる。ところが、太郎冠者は、下座に通された挙句、酒肴がもらえないのに腹を立て、履物を盗んで逃げ、捕らえられる。ここでは歌徳説話は既に陳腐化してしまっているのである。同様に狂言『二十九八』では、妻を求めするために清水寺に参詣した男が、観音の夢告により女と出会い、女の詠みかけた歌を読み解き、その家を探ね当てる。ところが、女が醜女だったのであわてて逃げる。この『二十九八』と『物くさ太郎』とかかわりは既に指摘されているが、<sup>(20)</sup>ここでも、和歌による男女の出会いが既に陳腐化して、笑いの素材と化している。したがって、『物くさ太郎』の和歌による成功談もまた、読者に驚きを与えるような新鮮さはもはやなく、むしろ「お約束」の展開であって、太郎の滑稽な返歌が笑いの対象として受け止められていた可能性が高い。

それでは、結末部において、太郎が実は仁明天皇の曾孫とわかり、甲斐、信濃二国の総政所となるという展開は、どのように考えればよいのであろうか。私は、この結末部は落語でいうところの「おち」「さげ」に相当するものと考えている。最後の太郎の成功もまた、読者を笑わせるものと考えてことで、このテキストを一貫して「笑い」を主題にしたものと読み解くことができるからだ。これは、「本地物のパロディ」という信多・小松の論と近似する立場である。

以上の分析を通して、このテキストを「笑い」の側面から読むと、あたらしの郷での太郎は、類い稀な「ものくさ」ぶりが笑われ、都に出てからの太郎には一貫して「田舎者」として笑われていることになる。また、尋ね当てた女房の屋敷では珍無類な和歌を詠んで読者の笑いを誘い、結末部においては「そんなバカな」という大どんでん返して読者を大笑いさせて終わるのである。

小松は太郎が克服不可能と考えられた「ひなび」から「みやび」への移行を実現することで、笑っていた読者が笑われる側に回ると指摘するが、それは「笑い」を「軽蔑的な嘲笑」に限定したことよってしている。ここでの「笑い」の性質はもつと多様で幅があり、「ことばの面白さ」「設定の陳腐さ」「展開の意外さ」などもまた「笑い」の対象になりうる。作中人物を笑うか否かは、ひとえに読者と作品との距離のとり方にかかっているとさえいえる。もし、太郎の和歌による成功を「ひなび」から「みやび」への移行と捉えてしまったら、女房の屋敷で磨きたてられた廊下を滑って転ぶ太郎の滑稽な姿は、うまく解釈に取り込めなくなってしまう。後半での太郎の成功は、田舎者の太郎を笑った読者の後味の悪さを免責し、「めでたしめでたし」と祝言で物語を閉じる役割を果たしている。

最後に、この作品が当時の社会の価値観を、何らかの形で反映しているとすれば、どのように評価すればよいのであろうか。ここではやはり、中世後期社会における和歌の位置づけを考えておく必要がある。

和歌は、言つまでもなく貴族文化の精華であつたが、中世では急速に一般社会に広まつた。先の歌徳説話を載せた『十訓抄』第十ノ三十九には以下のようにある。<sup>(22)</sup>

歌は、妹背の中をも和らぐる媒なるによりて、「色めく類、是を花鳥の使とす」ともあり。あるいはまた、「貧しき世を渡る橋とす」とも見えたり。その徳かたがた多かるべし。

ここで明らかのように、和歌は中世には一般庶民にとつても、恋愛や社会生活のための手段として機能しつつあつた。狂言には「歌を詠みかけられ、返歌を致さいでは、口ない蟲に生まるる」という諺も見えるほど、和歌は社会的に広がつている。<sup>(23)</sup> また、狂言『萩大名』に明らかに示されているように、和歌の教養がないことは、貴族以外の階層においても恥ずべきことであつた。脇田晴子は、中世後期の社会状況について、「官位・宗教・文化が天皇中心に集約されていく性格を持つ」と述べ、御伽草子もまた「決して民衆の欲求を生る直接的な形で示しているもの」と考えることは許されないと指摘している。<sup>(24)</sup> 傾聴するべき意見であろう。物くさ太郎が乞食から貴族へと成り上がる事ができたのは、和歌によつてであつた。このことは、和歌に代表されるみやびという価値観を、貴族社会が地方にまで浸透させようとした時代状況を反映している。それは和歌という文化装置を通して、政治的権力を失つた天皇の権威の延命を図り、日本社会を文化的に都を中心とした秩序に再編成しようとする貴族階級の論理を体现したものと云つてよい。

天皇に限らず、あらゆる権威は、権威者だけでは存在しない。支える側との相互作用が権威を生む。権威は、少しでもそこに近づこうとする新たな参入者の不断の努力によつて支えられている。事情は社会階層の上下のみならず、都鄙の間でも同じである。田舎者は少しでも都の文化に同化しようと努力するが、その努力が逆に、都の文化の権威と優位性を維持するのである。また、都人による田舎者への差別は、「笑い」によつてその都度、現前する。

潜在的な差別感情は、それが潜在している限りにおいては目に見えることはないし、差別する側もされる側も気付いていないことさえある。差別があるから笑うのではなく、なかば無自覚に発露した「笑い」という行為が、結果として差別を生むのである。そして、笑われながらも努力して都の文化に同化した田舎者は、新たな田舎者を笑う側に回るだろう。つまり、権威は常に更新され続けることによって、権威であり続けているということになる。この物語に即して言うなら、結末部は太郎の側から見れば確かに社会的上昇であるが、貴族社会の側から見れば、外部の新たなエネルギーを吸収して、天皇の権威を更新することに他ならない。それは、御伽草子『文正草子』において、貧しい塩焼きから身を起こして長者にまで成り上がった文太の出世が、二人の娘が都の貴族に嫁すことによって成就することとも、近似している。

『物くさ太郎』は確かに庶民の「成り上がり」を描いているが、それは庶民に寄り添う視点からではない。その成り上がり、和歌を介した天皇の権威によって支えられており、最終的には貴族社会に組み込まれることによって吸収されていることが重要なのである。そこに、天皇を中心とした貴族社会の文化的権威が地方にまで波及した中世後期社会のリアリティが存在するといえよう。

- (1) 『物くさ太郎』の本文は、横山重、太田武夫校訂『室町時代物語集』(大岡山書店、昭和十七年)に翻刻された、寛永頃刊丹緑本により、私に漢字を補った。
- (2) 佐竹昭広「物くさ太郎」(『国語と国文学』昭和四十年三月、のち『下克上の文学』筑摩書房、昭和四十二年所収)
- (3) 桜井好朗「下克上と神々 物くさ太郎考」(『文学』昭和四十六年十月)
- (4) 信多純一「夢想『物くさ太郎』論」(『谷山茂教授退職記念国語国文学論集』昭和四十七年十二月)
- (5) 小松和彦「物くさ太郎」に見る笑いとユーモア」(『民俗学評論』第十二号、昭和五十年、のち『神々の精



- 神史』伝統と現代社、昭和五十三年所収)
- (6) 砂川博『物くさ太郎』はパロディか 渋川版『御伽草子』に即して (『北九州大学文学部紀要』昭和六十年八月)
- (7) 徳田和夫『お伽草子の神』(『国文学解釈と鑑賞』昭和六十二年九月、のち『お伽草子研究』三弥井書店、昭和六十三年所収)
- (8) 浅見和彦『物くさ太郎』の歌より (『成蹊国文』昭和五十三年三月)
- (9) 藤木久志『戦国の作法』平凡社、昭和六十二年
- (10) 黒田日出男『物くさ太郎の着物と髻』(『姿としぐさの中世史』平凡社、昭和六十一年)
- (11) 保立道久は『ものぐさ太郎から三年寝太郎へ 昔話と中世史』(『国立歴史民俗博物館研究報告』五四集、平成五年、のち『物語の中世』東京大学出版会、平成十年)において、先の諸論の統合を試みているが、室町末から近世初と考えられる『物くさ太郎』の成立時期を南北朝時代に遡らせるなど、無理が多い。
- (12) 『閑吟集』十九番歌。謡曲『放下僧』ほか、狂言『花折』『花盗人』、謡曲『花丸』、女歌舞伎踊歌『万事』その他に採られている。(『日本古典文学大系』中世近世歌謡集 一五一頁。(岩波書店、昭和三十四年))
- (13) 『さいぎ』は、備前の国の佐伯が、所領の争いのために都に上り、和歌の仲立ちで美しい女房を妻とする。いずれ呼び寄せるという約束をして帰国した後、三年間都に迎えをやらない。都から女房は手紙を送り、それを見た佐伯の本妻が女房を迎えたのち、夫に愛想をつかして出家する。佐伯と、都の女房も後を追って出家するという内容。『物くさ太郎』とは、地方出身の男が都で、和歌によって美しい女房を手に入れる点が近似する。
- (14) 『御成敗式目』本文は、寛永五年版による。
- (15) 佐竹昭広『下克上の文学』(前掲)十頁

- (16) 市古貞二『中世小説の研究』(東京大学出版会、昭和三十年)佐竹昭広前掲書など。なお、近年では真下美弥子『物くさ太郎』生成論 色好みと愚か婿 「(『伝承文学の展望』平成十五年)に詳しく論じられている。
- (17) 『小男の草子』の本文は新潮日本古典文学集成『御伽草子集』(松本隆信校注、新潮社、昭和五十五年)による。
- (18) 上岡勇司『和歌説話の研究 中古篇』笠間書院、昭和六十一年、一七三―一七五頁。
- (19) 上岡勇司『勅撰和歌集に現れたる歌徳説話 その様相と傾向を探る 「(『説話論集第三集 和歌・古注 釈と説話』清文堂出版、平成五年五月、十頁。
- (20) 日本古典文学全集『御伽草子集』(大島建彦校注、小学館、昭和四十九年)二四四頁。
- (21) 小松和彦『神々の精神史』(前掲)一四三頁。
- (22) 『十訓抄』本文は、新編日本古典文学全集『十訓抄』(浅見和彦校注、小学館、平成九年)により、私に「」を付した。
- (23) 「他人から歌を詠みかけられて返歌をしなければ、来世には、口のない虫に生まれ変わる」の意。狂言『二十九八』、『箕被』に見える。
- (24) 『萩大名』では、萩見物に行った大名が、太郎冠者から教えられた和歌を憶えられず、その場で詠めずに恥をかく。
- (25) 脇田晴子『天皇と中世文化』吉川弘文館、平成十五年、一―三三頁。